

新島襄の書簡に見える「幸福」

——幕末武士階級の漢語——

浅野敏彦

一

新島襄は、一八六四年七月一七日（陽暦）に幕府の「国禁を犯し」（同志社設立の始末）て、国外に脱出、一年後にボストンに到着する。それから二年と八ヶ月後の一八六七年三月二十九日付け父民治宛書簡のなかで、新島は次のような決意と願いを述べている。以下、書簡本文は新島襄全集編集委員会編『新島襄全集3』（同朋舎、一九八七年）による。また、「幸福」の傍線はすべて引用者による。

- ① 小子も昔の七五三大とは大に違ひ深く此聖人の道を楽しみ、日夜忘らす其聖經をよみ、道を楽しみ善を行ひ、偏に他日の成業且国家の繁栄、君父朋友の幸福をのみ神祈仕候。（書簡番号17）
- ② 去から此天上独一真神は天にも地にも只独り（釈迦如来の如き鑽石の仏とハ相違いたし候）の神ニ御座候ハ、天地、星辰、

人間、鳥獸、魚類等をつくり水々御存在こ、にもかしこにも被為在、世人の善悪を御覽被成、善をなす者にハ未来の幸福不朽の生命を賜ひ、悪を為せし者に必らず罪を加へ、永々の困苦を賜ひ候間（同右）

「幸福」は、後述するように「幸福さいはひ」と振り仮名が振られている例があり、新島の用例を漢語「かうふく」であると考えて論を進めるにあたって、右に掲げた例が「かうふく」であろうと説明しておく必要がある。この点については、「君父朋友」「未来」を連体修飾語としていることが判断の根拠である。「朋友」は同義の漢字が重ねられていたので「とも」と訓むことも可能であり、「幸福」は「さいはひ」であるかも知れないのであるが、後掲の『椿説弓張月』に「君父の幸福かうふく」⑧ともあるので、「くんぷほういう」と音読みで、「幸福」も音読されたものと考えた。

浅野（一九九六）に於いて、『新島襄書簡集』（山岩波文庫、一九八八年一三刷改版）の書簡番号2～25に該当する書簡の漢語（「長ず・要す」などの一字漢語サ変をも含めて）を対象として、一四八二の漢語を抜き出し、『日本国語大辞典第一版』の用例と比較し、

A 同書の用例に近世以前の例があげられている漢語

B 同書の用例に明治以降の例しかあがっていない漢語・見出し語にない漢語・見出し語があっても用例が示されていない漢語に大別し、「A 75.7% / B 24.3%」という結果を得た。

本稿は、「A」に属する漢語語彙のなかの一つである「幸福」が、幕末武士階級^①である彼の語彙にあることを手がかりにして、副題に示したように、彼が生きた同時代の知識階級であった武士の語彙一斑を探ろうとするものである。

二

後述する電子化されたデータを用いた調査で得た用例の中で、文字列としての「幸福」のもっとも古い例は、本文が確かではないが、仙覚の『万葉集注釈』（文永六〔一二六九〕年）に採られている「摂津の国風土記逸文」の例である。引用は日本古典文学大系『風土記』によった。

③ 則乘此船而 可行幸 當有幸福（美奴売松原の条）

新島襄の書簡に見える「幸福」

日本古典文学大系は「幸福^{さきは}」として引用している。しかし、『日本書紀』『古事記』『万葉集^②』にも「幸福」の文字列は無い。また、中国の用例を「漢籍電子文献資料庫」（中央研究院・歴史言語研究所のサイト）での検索によって、「幸福」は「旧唐書」の「幸福昌縣」「幸福先寺」が「幸福」を文字列として検索できるが、これらの例はそれぞれ、「福昌縣」「福先寺」に「幸^ふく」と訓むべき例である。さらに『新唐書』の「帝怒、竄愈瀨死、憲亦弗獲天年。幸福而禍、無亦左乎」は、「以生而死」と同様の構文とすれば、『日本国語大辞典第二版』の補注が説くように「福を幸（ねが）ふ」と訓むべき例であると考えられるが、『漢語大詞典』（GD-ROM版）には、「幸福」の例としてあがっている。

右に述べた中国の例に照らすと、風土記逸文の「幸福」は、八世紀の確実な例とはしがたいのである。漢語ではなく、「幸福」という文字列であったとしても、「幸福」が一般化する時代を背景として、生じた本文とも考えられる。

確実に古い例は、ジャパンナレッジのサイトの『日本国語大辞典第二版』の用例全文検索で得られた熊沢蕃山『集義和書』（一六七六年）にみえる次の二例である。中村（一九八三）は、上田秋成『肝大小心録』を引き、「日本では江戸時代に使われ始めたと思われる」とする。引用は酒田市立光丘文庫蔵本（国文学研究資料館電子

図書館「所蔵和古書・マイクロ/デジタル目録データベース」による。

- ④ 故に攸好徳の幸福ある人は、次第を歴て徳を知も御座候（巻一六）
- 三）
- ⑤ 通達して幸福を得る時は人をよくし、窮塞して禍難にあふ時は其身をよくす（巻一六）

巻一六の幸福には「幸福」と「幸」にのみ振り仮名「サイワイ」が振られているが、有朋堂文庫が「幸福」としているように、また、後述の『雨月物語』『椿説弓張月』の版本のように、「幸福」を熟字訓のように「サイワイ」と訓んでいるとしてよいであろう。

蕃山の例によって、文字列「幸福」は、漢語「こうふく」でもあり、和語「さいわい」の漢字表記でもあったことがわかるのである。『集議和書』の次は、約九〇年後の『雨月物語』（一七六八）にみえ、『雨月物語』から『椿説弓張月』（一八〇七）までの四〇年間の例を得ていない。しかし、一八六〇年代に入ると二、三年の間をおくだけで、多くの用例を得ることが出来ている。新島の用例もこの間に入るのである。

木越治氏が電子化された上田秋成の本文によって、『雨月物語』以外にも秋成の作品では『肝大小心録』、『春雨草紙』の例が得られる。『肝大小心録』は中村（一九八三）、『日本国語大辞典第二版』

にも引かれているので、早稲田大学古典籍総合データベースで版本を閲覧できた『雨月物語』の例を引く。

- ⑥ 上皇の幸福いまだ盡ず。重盛が忠信ちかづきがたし。今より支干一周を待ば、重盛が命數既に盡なん。他死せば一族の幸福此時に亡べし（巻一・白峯）

⑦ 貧福をいはず、ひたすら善を積ん人は、その身に來らずとも、子孫はかならず幸福を得べし（巻五・貧福論）

『椿説弓張月』には「幸福」（前編・第一四回）の熟字訓の例も見えるが、次のように、「幸福」の例もある。

- ⑧ われ荷も君父の幸福に因て風濤の難もなく、異邦に往來して（前編・第七回）

秋成、馬琴に見えると、それも熟字訓の例であると、中国通俗物の影響を予想してみたくなるのであるが、白話小説が多く電子化されているサイトの「開放文学」で検索したが、わずか『警世通言』『剪灯餘話』の例を得るだけで、同サイト上にある『紅樓夢』『西遊記』『水滸全伝』に「幸福」は見えない。

『椿説弓張月』以降、新島までに得られた例は、儒学者（先哲叢談）、朱子学（榎堂日曆・象山書簡）に加えて洋学者（諳厄利亜語林大成・玉石志林・西洋事情）などの手に成る文献である。新島は、これらの学者層と連なる階層に属していて、これら階層の人々―幕

末武士階級が有していた語彙を共有していたことになるかと思われる。^⑥

三

「幸福」の語義についての考察は、辞書にみえる「恵まれた状態にあつて不平を感じないこと。満足できてたのしいこと。めぐりあわせのよいこと。また、そのさま。さいわい。しあわせ。」(『日本国語大辞典第二版』)という語義のみではなく、山田洗(一九八九)が、福沢諭吉、西周は「幸福」と訳しただけでは西洋近代の幸福観を捉えたことにはならないと考えていたのではないか、としている視点が、新島の「幸福」の語義の考察にも必要と思われる。

一九六七年一月二五日の民治宛書簡にみえる、「朝夕独一真神に向ひ大人及び全家之幸福を祈居候」(書簡番号21)は、山田(一九八九)の指摘にもある、福沢諭吉が「アメリカ独立宣言文」を訳したところに見える「幸福」とかさなる重みを内に含んだものであつたと考えられる。帰国後、板垣退助に宛てた書簡に「人此教を奉し而弥進まハ人類之造物主宰より賦せられたる幸福ハ弥益すへし」(書簡番号15²)と用いた「幸福」は、⑨に示す福澤の「幸福」と重なるものとなっている。

⑨ 天の人を生ずるは億兆皆同一轍にて、之に附與するに動かす

新島襄の書簡に見える「幸福」

可からざるの通義を以てす。即ち其通義とは人の自から生命を保し自由を求め幸福を祈るの類にて、他より之を如何ともす可らざるものなり(『西洋事情初編』卷二)^⑦
右に該当する「独立宣言文」は次のとおりである。

⑩ We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.^⑧

福澤の「幸福」は“Happiness”の訳語である。この点では、『日本国語大辞典第二版』が「幸福」の「語誌」に示す『諸厄利亜語林大成』(一八一八四年)の「Happiness 幸福、サイハイ」また次の見出し語「Happy ヘッピ 幸ナル 幸福ナル」が、当時の英学的環境と関連づけられるが、直接的な関係を指摘しているのではない。なお、中村(一九八三)では「幸福の訳を施してある」とし、当時は「音読より訓読が一般的であつたらうか」と推察されている。^⑩

半世紀後の『英和对訳袖珍辞書初編』(一八六二年)では、“Happiness”には「幸ヒニ」「Happy」には「幸ヒナル」とあり、ともに「幸福」の訳語はない。杉本つとむ編『江戸時代翻訳日本語辞典』(早稲田大学出版会、一九八一)に拠ると九語に「幸福」の訳語が見える。『研究社新英和大辞典第4版』に「神の恵みの深いこと、

幸福の身、幸運、多幸」の訳語が与えられている「Blessedness」に「幸福」の訳語がある。なお、『和英語林集成初版』（一八六七年）の「和英の部」に「幸福」はなく、「HAPPINESS」には「Raku: tanoshimi: saiwai: kanraku」が訳語にみえる。「BLESSINGS」には「On: megumi」とあり、『英和对訳袖珍書初編』の「Blessedness」にある「幸福」はない。^⑪

新島が親兄弟のために神に祈った「幸福」も、「さいわい・しあわせ」では十分表すことのできない、「独立宣言文」に見える「Happiness」のように、重い語であったと思われる。

象山の書簡に「貴家の御幸福」「天下精霊の幸福」が見えることを紹介している山田洗（一九八九）に導かれて、『象山全集^⑫』を調査したところ、⑪を見出した。

⑪ 当今某ならで叶はざる大任の御用有之候見込通りに参り候へば上一人より下億兆の幸福と奉存候（四月二十六日齊藤衛・岡野弥衛門宛書簡）

「上一人より下億兆」と個人的な「幸福」を言ったのではない象山の例は、独立宣言の「Happiness」につながる例とも言えよう。

四

「江戸時代に使われ始めたと思われる」（中村一九八三）「幸福」

は、ジャパンナレッジのサイトを利用した『東洋文庫』、「新編日本古典文学全集」、『日本国語大辞典第二版』の全文検索、及び『角川古語大辞典』の全文検索によって、熊沢番山『集義』（一六七六）まで遡ることができ、一九世紀中頃以降に多くの用例が得られた。

そこから見えてくるのは、陽明学、朱子学であり、「幸福」が、現在得ている例が中国に多くあるというのではないが、やはり、中国からの受容であるとするれば、古代漢語ではなく、宋以降の中世漢語である。それは、漢文世界の語とは異なる漢語であった。

新島の「君父朋友の幸福」は、『椿説弓張月』の「われ苟も君父の幸福に因て」と似通う。日本古典文学大系での調査では、馬琴は『椿説弓張月』（前編卷之一、拾遺卷之五）で五例の「幸福」を用いているが、「幸福」に「こうふく」と振り仮名が振られているのは引用した箇所だけであり、他は「さひはひ（さいわい）」の振り仮名である。

新島には、「幸福」を用いた同一書簡17に「此神喜んで其の祈祷を御聞き未来の冥福を被下候事必定ニ御座候」と「冥福」を用いた箇所がある。また、『椿説弓張月』の版本には、「さひはひ」と振り仮名が振られた漢字は「幸」「福」「億倅」以外に

⑫ 身を殺して仁をなし、國民を救はば、神も憐み人も喜み、

その應報空しからずして、王子誕生あらんには、こよなき國の

洪福也。(続編卷之二・第三四回)

と「洪福」がある^⑩。この「洪福」は、「開放文学」で検索すると、『三国演義』に「操笑曰…此天子洪福耳。」(第二十回)、『西遊記』に「小聖道…此乃天尊洪福、眾神威權、我何功之有？」(第六回)、『水滸全伝』に「目今深冬、天氣和煖、此天子洪福元帥虎威也。」(第八〇回)のようにある。以上の例からすると、馬琴は中国の白話小説から「洪福」を得たものと思われる。一方、「幸福」はそのように推測させる白話小説の例を十分得ることが出来ていない。しかし、「幸福」が秋成にもあるもので、二人が白話小説から得たということは、必ずしも当を失したのではないと思われる。

『角川古語大辞典』の全文検索で得られた『道二翁道話』の「あなただ任まかにしてみると、自然しぜんと身に幸福さいわいを得るといふ事じや」(初編巻下)は、聴衆に話しかけることばは「さいわい」であったが、書き言葉では「幸福」であり、秋成、馬琴の例を合わせ考えると、知識層への漢語「幸福」の浸透が推察できる。

しかし、「幸福」が「さいはひ」の表記、あるいは、和語「さいわい」に該当する漢語として書き言葉の層に浸透していくのには、時間がかかったものと思われる。『書言字考節用集』(享保二(一七七一)年の刊記をもつ平楽寺蔵版・前田書店複製)では、「サイハヒ」を表記する漢字に「幸・福・禧・祐・慶・頼」と単字を列挙し

新島襄の書簡に見える「幸福」

ている。「幸福」は、「身体・生活・美麗」と同じく、同義の漢字を重ねて一つの意味を表している語であるので、「さいはひ」と訓じる漢字を重ねて「幸福」と造語することも可能ではあった。西洋見聞記の中には、鉄道ターミナルを見聞して、自国の宿駅制度に比して、「行頭」という白話語風の語を造語することもあった(浅野二〇一四)。

『書言字考節用集』では、例えば「ありさま」には、下学集・魏都賦を典故とする「分野」、文選を典故とする「景迹」、続日本紀を典故とする「消息」や出典無表記の「行状」などの漢字列を掲げているが、「幸福」はこうした語とは違った層に属していた語であったと推測できるのである。

五

古典語において、「幸福」の類義語、あるいは周辺にあった語にはどのような語があったのかについて、宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院、二〇一四年)を用いて一瞥しておく。漢語が出やすい和漢混淆文であること、中世の作品であることで『平家物語』を取り上げ、「禍福」を表している[.3310(人生・禍福)]に分類されている語を抽出し、その中から「不吉・わざわひ」など、幸福に比してマイナスの語義の語を除いた結果は、次の通り

である。漢語は語構成要素の漢字でまとめた。

運⇨運／御運、宿運、聖運、帝運、天運

吉⇨吉、吉事

天⇨天運、天命

福⇨／罪福

繁⇨繁昌、繁榮

さいはひ、さいはふ

こうした語彙のなかに、「幸福」が入り込むのは一八世紀に入ってからであった。現代語の場合を注⑩に示した。

近代中国語における「幸福」の動きについても調べる必要があるが、そこまでは及んでいない。ロブシャイド『英華字典』には、「Happiness」には「福・禧・祉・祥・福祉・福氣・吉・福熙・福德」があるが、「幸福」はない。「Blessed」「Blessing」「Beatification」「Comfortable」にも「幸福」はない。現代の『英華大詞典修訂第三版』（商務印書館、一九八五年）の“happiness”には、「①幸福、②愉快、③適当」とあり、“for the of the greatest number”には「为了最大多数人的幸福」と「幸福」が用いられている。また、「①幸福」の後に古語の印をして「幸运」とあるところからすると、中国語における（舒畅）と心が感じられる状態を「幸福」とするのは、古くからではないと推測できる。もっとも、中央計算

院「漢籍電子文献資料庫」の検索で唐代の成立とされる『続高僧伝』に「幸運」は一例あるが、『漢語大詞典』は魯迅の例を引いて、「幸運」も中国において盛んに用いられてきた語ではない。

『日本国語大辞典第二版』の用例の全文検索をして得られる古い例は、見出し語「幸運」に引かれている「大乘院寺社雜事記・実隆公記」で、十五世紀末から十六世紀初頭にかけての例と、一六〇三年刊行の『日葡辞書』である。

周商夫『新名詞訓纂』（上海、一九二八年）に「感情・悪感・真相・達成・自然・周旋」と並んで「幸福」がある。同書は、日本からの借用語あるいは新語を中国の古い文献に照らして、中国に以前からある語であることを示した辞書である（『明清俗語辞書集成3』汲古書院、二〇〇五年、中澤規矩也解題）。「幸福」には「竜宮寺碑」の「幸承景福。翹首配天」を掲げているが、漢文では「幸いに景福を承く」と訓むべきところである。周商夫の意識では、「幸福」は日本語か新語であるという理解があったものようである。

右に見てきたことをまとめると、「幸福」は、日本語では「さいはひ」「運」、さらには「仕合せ」、中国語では「幸・福」で充足されていた意味領域に入り込むことがなく、十九世紀末、二十世紀を迎えて、勢力を広げてきた語であったといえる。

新島の用例を考えるとときに、キリスト教関係の文献とのかかわりを考えておく必要がある。浅野（一九六九）で「聖經」を「聯邦志略」に見えるところ。新島の「航海日記」にメモした記事は、『聯邦志略』などからの筆写である（『新島襄全集5』注解）とされるが、正確には算作阮甫が訓点、振り仮名を施した和刻本であって、杉井（一九九〇）に指摘がある削除されたキリスト教関係の記事に出てくる語であるので、二本を対照せずに結論つけた浅野（一九九六）での指摘は誤りであった。

宣教師マルティンが「古典的中国語によりキリスト教証拠論を中国的にまとめた」（吉田（一九九三）『天道遡原』には「以聖經發明之」（序）、「吾教論聖經」（引）「聖經所云天地以神之命而造」（上巻第二章）と「聖經」が見える。もともと、吉田（一九九三）によると、『天道遡原』は版によって本文の異同があり、同一語があったとしても、新島が同書に拠ったことには慎重でなければならぬ。加えて、『天道遡原』は、新島が帰国後の布教に用いたこと、山本覚馬が読んで、信者になったことで注意されているが、渡米前、渡米中に、新島が『天道遡原』を読んだという指摘はされていないので、右のように考えるのは誤った推測である可能性もある。

新島襄の書簡に見える「幸福」

また、『新島襄書簡集』の年表で指摘されるキリスト教小冊子、漢訳聖書抜粋が何であったかは明らかにはなっていない。

『新島旧邸蔵書分類目録』（同志社大学図書館、一九五八年）には、一八六〇年版をもとにして訓点が施された、明治八年に刊行された中村正直訓点本はあるが、帰国以前に刊行された版は所蔵されていない。そのこともあり、彼が同書を読んだということの指摘が無いものと思われる。しかし、右に指摘した「聖經」の他に、用例②に見える「独一真神」、父に進言している偶像崇拜の誠め（「何卒大人御目をひらき如此手に製したる像偶に御迷ひ被成ぬ様」書簡番号17）が、同書に見える。加えて新島が心引かれた「天父」も見える。

⑬ 世人莫不有生身之父。故又別之曰天父（引）

⑭ 非主宰天地之獨一眞神、即不可崇拜矣（下巻・第九章）

其二誠曰、勿雕偶像、勿拜跪之、勿崇奉之。可見人不可供奉偶像矣。（同右）

『天道遡原』のことは、佐久間象山の書簡にも

⑮ 兵馬より差上置候天道遡原聖教鑑略等は既に御還しに相成候義や。もし只今に御手許に御座候は、遡原にても鑑略にても一寸此者へ御轉附被成下度奉冀候（書簡番号507）

と見え、また、平田篤胤も同書の影響を受けたことが村岡典嗣によつて指摘されていて（前田二〇〇八）、本書は日本国内でも閲覧可

能であった。新島は、アメリカへの船上で乗組員から借りた「耶蘇經典」を読んで、「実に帰郷之上再び父母に逢たる心地恰も如此かと思はれ、心の喜斜ならず」（『航海日記』元治元年六月二五日）覚えるのである。用例⑬に引いた『天道遡原』下巻末尾に近い箇所は、このとき読んだであろう内容と重なるのではないかと思うのである。冒頭に引用した書簡に滲み出る父や家族を懐かしみ、自分のような息子を持ったことを誇りに思っしてほしい、また、心配しないでほしいという思いとも重なるものである。吉田（一九九三）所載の訓読文を引用する。

⑬ 夫れ我を生み我を育なふ者は父母、能く生じ能く育する所以の者は天父の命也。我を長じ我を鞠やなふ者は父母にして、能く長じ能く鞠なふ所以の者は天父の恩也（下巻・第九章）

『天道遡原』は直接聖書を読むよりは、キリスト教の内容を把握するのに適した伝道上の書籍であったので、広く流布するにいたった（吉田一九九三）。新島も布教に用い、覚馬も信仰心を持つようになった。また、同書にはキリスト教の歴史や教義を喩えて説いている他に、世界史、科学、人体に関して、西洋の学問に接する入門的な要素も含まれていて、アメリカで新しい学問、思想に接することになる彼にとってはありがたい書籍であったと思われるのである。また、漢訳は、幕末の武士階級にとっては、日本語でもあったので

あり、ことばの問題はなかったと思われる。

「幸福」は、『天道遡原』には用いられていないので、新島の「幸福」が、『天道遡原』とつながってくるというのではない。『天道遡原』には「寺満百城、家殷景福（寺百城に満ち、家景福ゆたかなり）」（中巻・景教碑文）と「景福」が見えるが、例えば、こうした文脈の中で、新島は自己の語彙にある「幸福」を用いたということになる。

「幸福」が、新島をはじめとする幕末の武士階級を含む知識階級の語彙にあったことは、佐久間象山、福澤諭吉、津田真道、加藤弘之、中村正直らの著作に見えることから明らかなのであるが、熊沢蕃山以前の用例を得ることができなかつたために、その源をどこに求めるかは明らかにできなかった。また、六も思いつきの域を出ないものであって、明らかにすべき多くのことを課題としている。

注

① 新島は天保一四（一八四三）年の生まれであり、『国史辞典』（吉川弘文館）のように、幕末を天保期以降と捉えたと、彼はまさに幕末維新の武士であって、この時代の一つの生き方をとった人でもある。

② 日本書紀、古事記については、日本古典文学大系を電子化したサイト「全文索引」(<http://www.seisaku.biz/>)、万葉集については木下正俊校訂『万葉集 CD-ROM版』（桐書房、二〇〇一年）によって検索し

た。

③ 「木越研究室・上田秋成の作品」 <http://kigoshi.sophia.labos.ac/ja/page/p4.html>

④ 「開放文学」 <http://open-lit.com/index.php>

⑤ 老夫受公祖活命之恩、太子昔日難中、又蒙昭雪、此恩直如覆載。今天幸福繁又照吾省。老夫衰病、不久於世（警世通言第十八卷、老門生三世報恩）

為兩人薦求冥間的幸福吉復脚高潔の品格、對朋友的深情厚誼、在江湖之間廣泛傳播。（剪灯餘話 卷一兩川都轉院志）

⑥ 浅野（一九九六）に「資料4」として新島と松蔭の共通語二一〇語を掲げた。新島一四八二語、松蔭一一二九語での比較である。

⑦ 慶應義塾編纂『福澤論吉全集第一巻』（岩波書店、一九五八年）による。

⑧ 「The Charters of Freedom」 http://www.archives.gov/exhibits/charters/declaration_transcript.html

⑨ 「外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会」（委員長長江利川春雄）「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」 <http://erikawa.s27.xrea.com/database2/> に拠った。画像は大修館書店発行の長崎市立博物館蔵本の複製によったと思われる。

⑩ 鹿児島大学図書館玉里文庫本（国文学研究資料館サイト上の画像による）では「幸福」に振り仮名はなく、オランダ語の記載もない。

⑪ 「幸福」は、『和英語林集成』では、第三版（一八八六年）になって、「HAPPINESS」の訳語に「kotuku: fukushi」が加えられた。「和英の部」に「KOFUKU」が立項され「カウフク幸福 (saivaw) n」とあり、「Happiness: good fortunes」の英語があつてはいる。『日本国語大辞典 第三版』の「語誌」は「明治期に入ってから (中略) happy, happiness

の訳語として「附音挿図英和字彙」（一八七三）に受け継がれて、一般化した」としている。

⑫ 信濃教育会編纂『象山全集上。下』（尚文館、一九一三年）

⑬ 詳細な調査をしていないので、偶然得られた用例は、辞書の項目執筆者が調査する文献、あるいは、索引などが存在する文献などの偏りからくるとも言えなくはないが、一九世紀中頃以降に得られる用例と同じ量の用例が、秋成、馬琴以前に得られるとは考えられない。

⑭ 国文学研究資料館電子資料館「大系本文データベース」による調査。

⑮ 『椿説弓張月』の引用は、日本古典文学大系によったが、前編巻一（六までは、板坂則子編『椿説弓張月前編』（笠間書院、一九九八年）により、その他は早稲田大学図書館蔵本（早稲田大学古典籍総合データベース）によって、版本の振り仮名を確認した。

⑯ 『日本国語大辞典第二版』の「さいわい」の見出し語の例に引かれている「南総里見八犬伝」の例は、「素懐を遂さし給はらば、一家の洪福（サイハヒ）この上なし」（巻五・四八回）とある。

⑰ 盛岡市中央公民館蔵本（国文学研究資料館電子資料館「所蔵和古書・マイクロ/デジタル目録データベース」による。）

⑱ 旧版の「分類語彙表」[1331・2331・3331]に分類されている語で、平家の場合と同様、「幸福」に比してマイナスの語義を持つ語を除いて示す。ただし、『日本古典対照分類語彙表』では「1331」に分類されている「繁栄・繁昌」は「1379」となっているが、平家と合わせるために、含めて示した。

運＝運、運勢、運命／開運、家運、国運、武運、盛運

吉＝吉、吉事、吉凶

幸＝幸、幸運、幸甚、幸福／多幸

福＝福、福利、禍福／幸福

俣侅、慶事、天佑

さいさき、さいわい、さいわいする、さち、しあわせ、めぐまれる、もっけのさいわい、(繁々繁栄、繁昌)

⑲ 新島のメモに次のようなものがある(『航海日記』『新島襄全集5』)。

〈内は和刻本『聯邦志略』(古典籍総合データベース)である。なお、割り注はポイントを落とすだけにして、調点は省略して引用した。

緬邦 地ノ大中華浙江 五分ノ四

〈興華地較、約比浙江省五分之四〉

泌河 東方 (曰泌河、即泌諾卜斯格在邦中之東曰基河)

基河 西方 (即基泥伯在邦中之西)

首郡 基泥伯 (首郡名基泥伯)

邦都 基於輿額士大 (邦都基於輿額士大)

⑳ 「聖書」の語も「瑣氏亦未見有聖書(上卷以人身為証)と見える。布施田哲也氏は「新島が初めて読んだ漢訳聖書抜粹——『真理易知』について」(『新島研究103号』二〇一二年)で、新島の伝記から該当する聖書をマカルティーの『真理易知』であるとす。布施田氏の示されたURLによって、オーストラリア国立図書館蔵の『真理易知』の画像を見るに、「聖經」はなく、すべて「聖書」である。また、「真神」「天父」も見える。

参考文献

- 杉井六郎(一九九〇)「大美聯邦志略の翻刻」(『史窓』47号)
 中村邦夫(一九八三)「こうふく・さいわい・しあわせ」(『講座日本語の語彙10語誌Ⅱ』明治書院)
 前田勉(二〇〇八)「南里有隣『神里十要』におけるキリスト教の影響——『天道遡原』との関連——」(『愛知教育大学研究報告57人文・社

会科学編)

森中章光(一九九六)『森中章光訳註・吉野政治補訂・鍋木路易／萩原俊彦 解題『天道遡原』を読む』(かもがわ出版)

山田洗(一九八九)『言葉の思想史——西洋近代との出会い——』(花伝社)

吉田寅(一九九三)『中国キリスト教伝道文書の研究——『天道遡原』の研究・附訳註——』(汲古書院)

吉田寅(一九九七)『中国プロテスタント伝道史研究』(汲古書院)

李漢燮(二〇一〇)『近代漢語研究文献目録』(東京堂出版)

浅野敏彦(一九九六)「新島襄の書簡にみえる漢語」(大阪成蹊女子短期大学研究紀要33号)

浅野敏彦(二〇一四)「見聞記『航米日録』に見える「行頭」をめぐって——幕末武士の近代語——」(『立命館言語文化研究25巻3号』)

〔付記〕『天道遡原』は、諸本の異同を確かめずに、便宜的に明治一四年刊行の『中村正直調点天道遡原』(架蔵本)により、調点を省略して引用した。